

Title	フランシスコ・ガーリの北太平洋探見記に見えたる日本
Sub Title	
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.119(447)- 127(455)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## フランシスコ・ガリーの北太平洋 探見記に見えたる日本

岡本良知

國家の意志による北太平洋探見航海は數度行はれたが、フランシスコ・ガリーの探見はその端緒をなすものである。一五八二年より八四年の三年間に互りメキシコより出でフリツピン群島、媽港に達し、再びメキシコに歸つた大航海であつた。その間復航の途中日本近海を過ぎ、不可怪な四叢島の消息を傳へた。我等日本人にとつては、その點に最も關心を置かせられるのであるが、寧ろガリーの航海の終始のうち最も興味多きは今のベーリング海峡の存在を探つたところである。元來その探見の最大目的はそこにあつた。ディオゴ・デ・コウトの *Da Asia* (Dec. X, Cap. III) に、『國王ドン・フェリツペ、かの國(ヌエバ・エスパニヤ)の海岸を上りて、タルタリヤの上方にて北海に通ずる海峡のありや否やを知らんとて、(北緯)四十度以上の海岸を能ふる限

り探見せんと欲せられ、ノール・エスパニヤの副王に命じ、斯の如く希望せしところを發見するに堪ふべくこの事業に練達なる人物を送らしめられたり。』と説明するところを以て知るべきである。尙引き續きコウトの記述に據れば、有名な英國の北方探見者ジョン・カボット、セバスチアン・カボット父子の北極洋より韃靼に達せんと希望し、セバスチアンによつて一五五七年五八年に互り今のロシア及びシベリヤ西北部を探見したのみで遂に志を果さなかつたのに刺戟せられて、この北太平洋探見が企てられたものであるといふ。

ガリーの航海記はその航海の終始を詳記したものであるらしいが、こゝにはそのうち日本近海航行とベーリング海峡探見に關するところを述べやうと思ふ。

フランシスコ・ガリーの北太平洋探見記に見えたる日本(岡本)

(四七)

フランシスコ・ガリーの航海記は、『彼自のノーフ・エスパニヤの副王にその航海の次第を報告し、副王は國王ドン・フェリツペにその報告を送りたり』(Conto, Da Asia)と明記せられた如く彼自身の手になる最も信頼すべきものである。

英國大使館外交官補シ・アール・ボクサー氏の示教によつて考へるに、恐らくそれは後に傳はり、M. F. de Navarrete,

—Biblioteca Maritima. I, Madrid, 1851 中ニ Francisco

Gali, —Diario de la Navegación que hizo en año 1582 con orden del Rey D. Felipe II á buscar paso al Japon por el nor te y el oriente として出版せられたもので

あらう。併し、私はその書を読む機会を有しないから、他の書によつて、それを窺はねばならない。コウトの Da Asia に、『今我等の手にするを得たる彼の報告によりて説述せんとす。』といつて、殆んどその報告の全文を、一人稱を三人稱に書き換へ、ところどころにコウトの意見を添加して載せられてゐるに據らうと思ふ。添削といふ程のことは勿論加へられてゐる。尙、その上、昨年前記のシ・アール・ボクサー氏が入手せられた João Baptista Lavanha, etc., —Roteiros para varios pontos da Asia, Africa, e America と稱する寫本の十六世紀末世界航海指針記のうちに一部分が

ガリーの報告が載つてゐるのを読むことが出来た。この寫本は殆んど同世紀直後に手書せられたものであつて、甚だ珍らしき、且つ貴い書である。同書のガリー航海記は一人稱で述べられ、且つコウトの文と稍々異なるところがあつて寧ろ幾分委しく、正しく記述せられたところより見れば、恐らくガリーの報告そのものゝ轉載であらうかと考へられる。次に以上の二書によつて彼の航海の次第を見やう。

先づコウトの文を次に載せる。ガリーの人物を説いて『ノーフ・エスパニヤの副王は、この事業を遂行せんとして、練達にして、正しき宇宙學者たるフランシスコ・ガリーにこの航海を依頼せり』と記したところに據れば、ガリーは當代に於ける地理學の智識も有した人であつたらうと推測せられる。『ガリーは、(北緯)五十度に至るノーフ・エスパニヤの沿岸を探見し、大陸を貫通する間隙ありや否やを實見せよとの訓令を携行して一五八二年三月十日アカプルコ港を出帆』した。ガリーは往航では西に直走して、ラドロエンズ諸島(今のマリアナ諸島)の最南を過ぎフィリツピン群島に達した。その間及びフィリツピン諸島に就て彼のなした詳細な實測報告はこゝに閑却する。彼はマニラで越年し、それより王の訓令に従つて媽港へ來た。

媽港より日本に向ふ航海の次第をコウトは次の如く述べた。

「媽港にて彼は、(毎年)七月にあるべき日本へ向ふ氣候風を待ちてありたり。而して、八四年のその月(七月)二十四日開帆せり。東南東百五十レグア船を行り、ベスカドーレス諸島(註、今の澎湖諸島)の淺瀬及び東側のレキオス(琉球諸島)の發端にして(北緯)二十一度にあるフェルモ一ザ諸島(臺灣島なれど、複數に書きたるは誤なり。)と稱するを迂曲せり。この航路にては、それらの諸島を望見せずと雖も、ガリーの伴ひたる一泉州人安針(註、單數に書く)によりてそれが消息を得たりしなり。フェルモ一ザ島を迂りて、レキオス諸島を過ぐるまで東及び北東に二百六十レグア走らせ、(その間)諸島より五十レグア離れてありたり。かの泉州人安針(註、複數に書く)曰く、その諸島はその數無限にして、數多の良港を有し、その住人はフィリツピンのピサヤ人の如く顔、胴體に描畫す、また金を産し、土人等は鹿皮及び金粉を積載したる小船にて支那及び日本に赴くと。諸島の東北端は(北緯)二十九度であり。諸島を過ぐれば、日本諸島あり。全諸島は經間(東西)百三十五レグアを有し、東端は(北緯)三十二度にあり。全諸島を迂

曲するまで、東及び北東四分一に前記の百三十五レグアを走り、前方七十レグア進みたるに、更に三十レグア(間)に四個の集合島に於ける一バルコンあり。四島には、身體小くして、大なる結髪の人々住し、支那・日本人とは甚だ異なりたる語を有し、金・木綿織物・鮪の如く鹽藏せる魚を交易品としてかの諸島(日本)に赴く。この諸島にフランシスコ・ガリーはアルモニカスと命名せり。それより東及び北東四分一に向けたり。』

以上の文に相當するところをボクサー氏所藏の寫本の一四七葉より一四九葉に見える「ポルトガル人の在る支那の港媽港よりノーワ・エス・パニヤへ行はれたる航海」と題する一章のうちより次に譯出する。

「予は八四年七月二十九日媽港を出帆したり。港外に至り白嶼(Theo branco)を過ぐるまで南及び東四分一方に向かへり。その嶼を過ぐるや、ベスカドーレス諸島の淺瀬及びレキオス諸島の發端にしてフェルモ一ザ島と稱するを迂曲せんため東及び南東に百五十レグア走らせたり。こは蓋し、泉州人一安針の助言と消息によれるなり。それらの諸島は(北緯)二十二度弱にありて、深さ三十尋あり。諸島を望見せざりきと雖も、緯度及び水深によりて既に迂曲し

たるを悟れり。フェルモーザ島を過ぎて、方向を東及び北東四分一にとり二百六十レグア走りたり。かの泉州人安針予にいひて曰く、その諸島(琉球)はその數無限にして、數多の良港を有し、フィリッピンのビザヤ人の如く、顔、胴體に描畫し、その特殊なる風に着衣せる人々によりて住まる。また金を産し、住人は鍍金せる皮革及び金粉を積載したる小船にて支那及び日本に赴くと。予はこの安針の言に信賴せり。蓋し、彼の予に語りたるその他の諸事一般に確實なるを知りたればなり。諸島の東北端は(北緯)二十九度にあり。諸島を終れば、日本諸島あり。そは經間百三十五レグアを有し、東端は(北緯)三十二度にあり。全諸島を過ぐるまで東及び北東四分一に前記の百三十五レグアを走りたり。而してかの泉州人安針の予に與へたる報告に依れば、そこより七百レグア前進したらんには、四個の集合島を發見すべきなり。彼の予に語る如くは、彼の日本に於て實見せるところに依り、そこには身體小くして大刀を帶び頭に大なる結髪を有する人々あり。その賣らんとて賣らす商品は金粉・木綿織物・鮪の如き鹽藏魚にして、その人々日本よりも東にある島々より來れりといへるなり。その住人等の與へたる消息によらば、その諸島が或る方角に存

在するを予は了解し、それにアルメニサンと命名せり。而して、予はかの泉州人安針の予に告げたる位置に程遠からざるを知りたり。この安針また、全日本諸島には諸良港あり、必需なる凡ての食糧豊富にして、その人々は甚だ理解よく、その國土に大なる諸鑛山存するの故に多量の銀を産すと予に確言せり。』

この寫本の一節をコウトの文に比較するに、先づ、コウトの記する七月二十四日媽港出帆が、二十九日出帆となり、四叢島の住人の輸出する鹿皮が鍍金した皮革と更まつてゐるのは、その何れが正しきや判斷し難い。コウトにフェルモーザ諸島と一度記して再びフェルモーザ島と述べたのは事實に照して前者の誤りであることは明かである。コウトの文に泉州人安針が複數で書かれたのに、寫本には常に單數であるに就ては、私考では恐らく寫本の方正しく唯一人の安針であつたであらうと思ふ。蓋し、この文意に依れば、ガリーは餘程その安針の智識と經驗に信賴し、常にその指導に従つたやうであるが、これは唯一人の熟練な人に充ちて考へるべきであらう。四叢島の位置をコウトに日本より七十レグア東とあるのに對し、寫本に泉州人安針の指示にて七十レグア東にあると見えるのは、後者の誤りであるこ

とが略々明かである。七百レグアは三萬八千八百八十五キロメートルであるから餘程の遠距離で、當時の航海では一箇月餘を費して辛ふじて到達し得たであらう。これは恐らく寫本の寫し誤りで、その原文には七十レグアと記されてあつたに違ひない。尙、兩者の文にはその他に用語の上にも小さな相違が多い。以上の諸點にも劣らぬ兩文の重大な相違がある。コウトは單に臺灣島の迂曲航路と琉球の消息とに於てのみこの安針の名を録したが、寫本ではそれ以外にも、四叢島の消息といひ、日本の消息といひ皆泉州人安針の教へたところであると明記した。而も、寫本ではその消息がコウトよりも詳しく、且つガリーリの言としてその安針に信賴したこと、その理由とを述べてある。以上の相違點を以て考へるに、コウトの文ではその編纂に當り相當原の報告が削減せられたやうである。これを反對にいへば、寫本はその一人稱で記述すること、その他の記載方とに依つて、ガリーリ自身の報告を寫したものであらうといつても不當ではない。餘程控へ目に考へても原の報告に極く近いものである。

今、この文中に見える日本及び日本附近の諸島の消息を検するに先だつて、最も注意すべきは、その凡てが一支那

フランシスコ・ガリーリの北太平洋探見記に見えたる日本（岡本）

人の智識の範圍を出でなかつたことである。遠くより探見に來ながら、遂に自ら實見することなく歸つたガリーリの怠慢と、従つて支那人のいふまゝを録したその報告の價值少きこととは、これを讀む者に失望感を抱かしめる。併し、その消息が甚だ非實際的であることは、また反面より見て、興味深い所以でもある。これを讀む者には當代支那人の非科學的な地理概念を連想せずには了解し難いところがある。蓋し、一五八〇年代にあつては既にポルトガル人によつて、日本の地理的智識は稍々正確なものが得られ、殊に當時の極東航海者が略々それに通じてゐたこと、諸書によつて推定し得る。然るにフランシスコ・ガリーリは敢てそれに據らずして、一支那人の無稽に近い考を無條件に肯定した。彼が、極東の事情に深く通達してゐなかつた故かも知れない。この航海記の文を讀むに、その航路里程・方向・緯度の觀測に於ては、誤りがないのはガリーリの實驗に基く故である。琉球人の顔面・胴體に文身ある如く述べたに就ては、その事實の有無を私は知らぬから何ともいひ難い。金を産するとは、恐らく琉球人が日本等より得て他國へ仲介貿易をなしたためにその國に産する如くに思はれたのであらうが、それを支那及び日本へ輸出したとは恐らく眞實ではあるま

い。日本より得て日本へ輸出することが考へられぬから、支那へのみ輸出したのを、かの泉州人安針が誇張して日本をも添加したのであらう。日本の東七十レグアにある四叢島の記事は甚だ空想的である。その住人の風俗は全く日本人のそれであり、その舶載する商品も殆んど日本のものである。假に方角を變へて考へ、東を北に改めて北海道か千島と見てもその土人の風俗と産物に於てそれに當らず、南に改めて伊豆諸島または小笠原諸島のそれにも適しない。四叢島は恐らく、支那人の頭に描かれた架空の島にして、その風俗と産物とに日本のそれを適用したのであらうかと思はれる。終りの日本に關する消息には一點の疑ふべきことがない。思ふに、福建廣東の支那人が日本に往來してその真相に通じてゐたので、かの安針がガリーに誤りなく傳へたのであらう。

要するに、ガリーの日本に關する記載は支那人の智識そのままであるだけ誤りに満ちてゐるが、併し一方から考へれば、當代のヨーロッパ人東方航海記中にあつては稀な珍しい文であることに興味が繋がる。

次にフランシスコ・ガリーのベーリング海峡探見を見や

う。ボクサー氏所藏寫本の文は次の如くである。

『東及び北東四分一方に向かひ、日本よりへ東三百レグア進みたるとき、(流れ)穩ならざる一海(潮流の意)を發見せり。そは北及び北東より來り、甚だ緩慢にして、憶測だになし難き廣茫たる海なり。吹き來らん風を以てするも(流れは)消滅もせず、激することもなし。斯くの如くにして七百レグアを進航せしまで常にその海(潮流の義)を見た。それよりノーワ・エスパニヤの沿岸に二百レグアになりしとき、何等の徵示なくしてその海(潮流の意)は終りたり。これに依りて、予はノーワ・エスパニヤの大陸と、小アジア及びタルタリヤとの間を行く海峡なるを了解し、また(前記せる)七百レグアの進航中予は多くの鯨・アルボラス(魚名不詳)鯨を發見せしが、そは産卵し生殖せんため一般に海峡及び潮流中に遊ぶ魚なり。これによりて予はこれを海峡なりと信ず。』

次にコウトの文を譯出する。

『日本より東三百レグア進みたるとき、一大海(潮流の意)を發見せり。そは北及び北西よりの(流れ)穩ならず、幅廣く、廣潤にして淺瀬なく、また妨ぐるものもなく、吹き來らん風を以てするも靜穩ならざりき。斯の如き状態にて

航海は七百レグア續きたり。その航海中多くのバルサ(註、*Balsa* は誤りにて寫本に *Baleia* とあるが正しかるべく、鯨の義なり)アルワコラス・鯨を發見し行きたり。そは卵を漏出し生殖をなすために海峡及び潮流中に絶えず游泳する魚なり。これに依りて、ガリーリはノーワ・エスピニヤの大陸とタルタリヤとの間に海峡ありと推定し、その如くに檢認せり。』

この報告に據ればガリーリは推測のみに頼つて兩大陸の海峡の存在を認めたのであつた。彼の到達した地點の緯度を記さなかつたが、北東に向つて三百レグアと七百レグア即ち千レグア進んだ。千レグアは五千五百五十五キロメートルに當る。而して、その地點はアメリカ大陸に二百レグア距るといふのである。而して、ガリーリの報告(寫本)には、上掲の文に續いて、『その方向を進み、ノーワ・エスピニヤの沿岸に着きたるとき、そは(北緯)三十七度半なるを知りたり。』と記したから、その着陸地は今のサン・フランシスコの近くであつたに違ひない。これを以て考へるに、ガリーリの航路は北方に上ること高からず、高く見積つても今の日本郵船會社やカナディアン・パシフィック會社等の船の北太平洋横斷航路を上らなかつたであらうと推測せられ

る。その記述ではアレウト群島の近くにさへ達しなかつたやうだ。そのいふ七百レグアの間渡つた潮流とは、黒潮の北部近くを斜に横斷したかと想像する。蓋し、溫海にのみある鯨を見たところを以て考へるに寒流には乗らなかつたのであらう。従つてそのいふ鯨も溫水にある眞甲鯨であつたであらう。アルボコラスといふ魚は如何なる種類かは知らない。ガリーリが海峡存在理由の根據とする潮流の急激なのは確に一理ある觀察であり、潮流中に魚類の産卵することのことも疑ひない事實であるが、上記の如く北上すること高くなかつたのは、彼の智識を以て徒らに架空の推理をなさしめたに過ぎない。併し、兩大陸間海峡の存在は嚴然たる眞實であるから、彼の架空な推理に尙海峡發見の發祥的な功績を歸すべきであらうか。思ふに、これはガリーリの智識と推理よりのみ結果したことではなくして、當代の有識者が殆んど、海峡の存在すべきことを想像してゐたから、既にガリーリの出發前よりその存在を先入的に想像して航海中にその理由を作つたに過ぎないのではなからうか。デイオゴ・デ・コウトは海峡探見の文に附して自己の見解を添へ、『吾人の判斷に従へば、こは(ガリーリの認めし海峡は)正しく、モスコビヤ及びタルタリヤによりてアジア大陸を



切斷し、またアジア大陸の終るところに面してノーワ・エスパニヤを閉端するウラカンの陸中にてその方に開口するものを實見せんとせしセバスチアン・カボットの追求せるところのものなり。』といつたのは、當代の識者の意想を表現して餘りある語である。

ディオゴ・デ・コウトはこの海峡探見記の次に甚だ興味深い次の一節を載せた。それはこの私の文の主題外のことであるが次手だから譯出する。

『ガリーリはその航路を續行し、三十七度半にてノーワ・エスパニヤの沿岸に到着せり。そは高峻なる地にして密林に覆はれて暗く、積雪なきところなり。蓋し、一五四〇年ノーワ・エスパニヤの副王ドン・アントニオ・デ・メンドーサの命によりフランシスコ・ワスケス・デ・コロナードの發見せしところなり。ワスケスはこの沿岸にて、船尾に黄金の水受壺を有する商船を發見せしが、彼等(船の人々)は所作によりて、その郷國より三十日にて來れることを語れり。ジョアン・バプチスタ・ラヌジオが諸航海記をイタリヤ語にて編輯せる書に語るところに従へば、かの商船はカタイヨの港のものなるべく、フルカンとアジア大陸との間のかの

海峡より現れ來れりと(考ふるは)可能なるべし。そはまた、ガリーリの發見せしアルモニカ諸島のものたりとも考へ得べけん。蓋し、船の人々はその地方を航海すればなり。』コウトのいふ如くは、一五四〇年にアメリカの西岸でフランシスコ・ワスケス・デ・コロナードの遭遇した商船は、このやうにコウトの推察した航路を経てアメリカに達したのではなからう。コウトは北極洋を發し、ベーリング海峡を通つたものといふ破天荒な考をこれに加へた。恐らくは彼がベーリング海峡をマガリャエンス海峡を通過し得た如きものと想像した一證である。

このアメリカ西岸に達した商船に關してはコウトは明らかに他書より轉載して自己の意見を加へたものである。コウトの據つた出所と思はれるのは、アントニオ・ガルワンの *Dos Varios Descubrimientos*…(一五六三年刊)である。その書(初版)七六葉に見える一節を次に抄出する。

『この五四二年ノーワ・エスパニヤの副王ドン・アントニオ・デ・メンドーサはその部下のカピタン・安針等をして、(嘗て)コルテスの兵上方に達したるエンガニョ岬の沿岸を探見せしめたり。彼等は北緯四十五度にありといはるゝセラス・ネバダス(雪山脈)まで行きたり。そにて商品を積み

たる船(複數)を見たり。そは船尾に表章として金銀製の鷗その他の鳥を装置せり。そは蓋し、日本人若しくは支那人のものなるべく思料せられたり。彼等(船の人々)曰く、その郷國より航海三十日餘なりと。』

ガルワンの文を出所とすれば、コウトはこの事件の年に於て二年を誤り、位置に於て四十五度の北部沿岸であつたのを三十五度半の沿岸となし、また船尾に標章として金銀製の鷗等の像が備へられあつたのを、金製の水受壺となした。この最後の誤は甚だ識別し易く、ガルワンには *alcaturuzes*(鷗)とあるのをコウトは *alcaturuzes*(上に水受壺と譯した)と寫し誤つたのであらう。

更にハックライト版英譯本のアントニオ・ガルワン發見記に據れば、ガルワンの記述は、*Gomara, Historia General, lib. 6, Cap. 18* より傳へたものであるといふ。而して、ガルワンの記載の外に、ゴーマラの著書の原文より附加して、かの商船の設備は鷗等の像以外にも、『and had the yards of their sails gilded, and prowsse laid ouer silver』とある。遡つてゴーマラの著書を見る必要があるが、今その便りを有せぬから、假にガルワンの文に信頼し、次の興味ある想像を加へて見やう。

ガルワンのいふ如くは、一五四二年(日本の天文十一年、明の嘉靖二十一年)日本または支那の商船とも思はれるものが一・三艘太平洋を横斷して遙かにアメリカ西岸今のオレゴン州ノ沿岸に到着したのであつた。若しさうだとすれば、特に企圖してこの大航海を敢行したのであらうか。それとも漂流したのであらうか。恐らく漂流であらう。その文に日本人または支那人らしく述べたところより見れば、少くとも船員の容貌にそれらしいところが見えたのであらう。船の標章その他の設備をも考へて、果して日本船か、支那船か、それとも他の國の船かを世の識者の研究によつて明かにせられるならば甚だ興味深いと思ふ。

私のフランシスコ・ガリーに對する留意を喚起したのはシ・アール・ボクサー氏であり、且つ本稿の據つた同氏所藏の寫本を見せられ、尙ガルワン著書初版も同氏のものを見せられたのであつた。その他の點に於ても少なからぬ示教を得た。終りにボクサー氏に深謝の意を表して擱筆する所以である。